



内皮機能障害および C-Reactive Protein は本態性高血圧における糖尿病の危険因子である

KEYWORDS// 2 型糖尿病, 本態性高血圧, 危険因子, 内皮機能障害, CRP

2 型糖尿病および本態性高血圧は冠状動脈疾患の主要な危険因子である。また、糖尿病患者や高血圧患者では、動脈硬化症に至る初期段階において内皮機能障害が証明されている。著者らは前腕内皮機能障害が本態性高血圧患者において 2 型糖尿病の独立予測因子であるかどうかについて研究した。研究では、初診時に 2 型糖尿病がなく、グルコース代謝に影響することが知られる薬剤を服用せず、高血圧治療を受けていない白人外来患者 400 人(男性 183 人, 女性 217 人, 年齢 22~60 歳)を被検者として登録した。内皮依存血管拡張はアセチルコリンの動脈内注入により検査し、インスリン抵抗性は HOMA (homeostasis model assess-

ment)により見積った。追跡期間中に患者 44 人が 2 型糖尿病に進行し、発症率は 2.4 例/100 患者-年であった。Cox 多変量回帰分析による解析では、アセチルコリン刺激による前腕血液流量ピーク百分率の増加および C-Reactive Protein のみが 2 型糖尿病の独立危険因子になった。アセチルコリンによる血管拡張の応答障害は本態性高血圧患者の 2 型糖尿病への進行を予測する。

(Perticone F, Maio R, Sciacqua A, et al: Endothelial dysfunction and C-reactive protein are risk factors for diabetes in essential hypertension. Diabetes 57: 167-171, 2008)

(埼玉県立大学保健医療福祉学部 鈴木優治)